

合唱団ホームページアドレス <http://www.wiengifu.org>

# 音楽とは 横への感性なり!

2

月号

2019年2月1日  
編集・発行/  
ウィーン岐阜合唱団

岐阜の街 ウィーンの如く 音楽(おとたの) 作:音楽総監督 平光 保

## ウイン、ウインの関係がステージと客席に 第20回ウィーン岐阜合唱団「第九演奏会」の コンサートを聴いて

田丸且行先生からのご寄稿です

ウイン、ウインの関係とは、経済用語でいう提供者と受益者が渾然一体となるような状態を指し示す言葉。  
(ウィーンに引っ掛けたギャグではありません)

それは、シラーやベートーヴェンが希求した「人類は皆兄弟、互いに抱き合え」という理念と一致する。今回の20回目のコンサートでは僕は正にステージと客席が音楽で一体となる境地を味わった。ステージからは紡ぎ上げられた崇高な音楽が客席へのサービス精神と相俟って、客席に降り注いだ。客席も同じような状態で感応し反応した。相乗効果で益々熱い雰囲気満たされ参加者は全員、至福の時間を持っただろう。しかも、震災義捐やプログラムが暗示する他者への思いやりや尊敬の念。これは言葉では表現出来ない。感じるしかない部分が多い。参加者のみ許された特権だ。

第1部のディズニーやヘンデルのハレルヤはキリスト教に縁が遠かった農耕民族の我々にもストンと納得共感できた。これも人類の共有財産との思いを深めた。当日は迫力ある表現。表現する欲びに没頭する表情は電波のように伝わってきた。高級なステレオを前にしたような臨場感を味わった。それにもまして管弦楽団の研ぎ澄まされた表現力には脱帽。特に第3楽章は絶品。終わりに近

くに出てくるチェロの美しい旋律表現は絶品としか言いようがない。ベートーヴェンが聞いたら何というか。想像するだに心震える。オリエンタル人間がここまで到達するのかと驚くと同時に自分の才能や理念を深くかみ締めたに違いない。天上を畏怖し想像する世界は正に人類共通と確信したに違いない。

それにしても、ウィーン岐阜合唱団、管弦楽団は何という精神の高まりを持ちながら才能ある方々の集まった集団だろうか、改めて深く感動する。

この集団は、音楽で地域の人々と触れ合いや活動を通じてベートーヴェンやシラーの信者にしてしまった感がある。音楽だけを求める集団は多々あるが、人間の生き様にまで想いを深めながら、それに奉仕する活動は僕の体験から言うと稀有。益々使命感を高め活動されん事を願う。

20回の積み重ねの歴史は、今後どのような道筋を辿っていくのだろうか。是非見つめ続けたいものだ。

### 田丸且行先生のプロフィール

1941年愛媛県で生まれる。愛媛大学、東京芸術大学を経て財団法人ヤマハ音楽振興会に奉職。その間テキストの開発、製作、指導実務に携わる。

# 「今わたくしたちが しなければいけないこと」

ウィーン岐阜合唱団 副団長 見田村 勝信

いま 私たちが憧れ、ひたすら追い求めている西洋音楽、いわゆるクラシックというものは16世紀頃からピアノやヴァイオリンの発達とともに徐々に進化してゆきました。しかしながらそれはまだ広く大衆に支持されたものではありませんでした。まだそんな余裕は殆どの人になかったのです。まさにそれを支えたのは、王侯貴族と教会でした。西洋音楽は、王侯貴族と教会の庇護の中で育ったと言えます。殆どの人々は苦しい農作業に明け暮れ、唯一日曜日ごとに教会に行き神に祈りを捧げ、讃美歌を歌い、つかの間の天国を味わったことと思います。ハーモニーは人々に深く根付いています。仏教にそのような音楽性がないことが残念です。

幸い現在は皆の生活が豊かになり、それとともに広く私たち一般大衆も音楽を楽しむことができるようになりました。クラシックの垣根が随分低くなりました。素晴らしい音楽家、演奏者、歌手が綺羅星の如く活躍する時代になりました。それは大変素晴らしいことですが、残念ながらまだ日本では、文化の違いから演奏家が増えた割には聴く側がそれに伴っていないということです。いわゆるヨーロッパに比べ、需給バランスが悪いということになります。ウィーン岐阜合唱団のモットーであります、「岐阜をウィーンの街の如くに」という理念はまだ途なかばといえます。

今回の第九演奏会は、皆を感動させる素晴らしいものでした。しかし残念ながらチケットの

販売枚数は815枚と近年にない低調でした。招待者を含めた総入場者数は890名で、3年前の2015年には売上総数1014枚、総入場者数1135名と比較しますと200名余り少なかったこととなります。第九演奏会は今回で20回目を迎える節目の年ですが、過去には1500名を超える入場者の時もありました。

合唱団にとって定期演奏会は一大事業です。事業の成功には素晴らしい演奏をすることはもちろんですが、多くの人に聴きにに来ていただくことが不可欠です。私たちの演奏会を支えていただいているオーケストラは私たちと違い、プロのオーケストラです。

815枚の売り上げでは諸経費を賄いきれません。どこのアマチュア合唱団も共通の悩みですが、「チケットぴあ」で放っておいても売れるような状況ではありません。私たち団員が売るしか術はありません。

いつも私たちの合唱を素晴らしい演奏で支えていただいている、オーケストラの皆さんにしわ寄せがいくようなことがあってはなりません。皆様チケット売り上げには毎回努力しておられることと思いますが、もう一押し、二押し ご協力をお願いします。参加者一人一人があと一押しすれば120枚、もう二押しすれば240枚。あと二押しで1000枚を超すことができます。

今年はワンモアチケット、ツーモアチケットを合い言葉に頑張りましょう。

# 第20回ウィーン岐阜合唱団「第九演奏会」を終えて

岐阜本部 アルト 山下 千恵子

一年の締めくくりとして年末に第九を歌う事は、今回で2回目となりました。

振り返って今、歌え終えた満足感で一杯です。私は本番中、舞台に立ちながら一瞬、歌うことを忘れ「あっ！」と、息を飲むことがあります。

ドッペルファーガになり、練習記号の O→P→Q 部分に進むにつれ Freude! や Seid um-schlungen! や Mil-li-o-nen! が各パートに入れ替わり、f から ff へと盛り上がるにつれ、団員一人ひとりの声の一つの大きな「うねり」となって舞台から客席へ向かって飛び出していくことに感じ、コンサートホールの宙に感じ、客席に感じ、とてつもないエネルギーを感じました。あまりの感激に、「うるっ！」と涙が滲みそうになることをこらえ、心

を込め、力一杯歌い切りました。

合唱の素晴らしさって、こういう事なのでしょう。私はまだ経験不足で暗中模索状態ですが、上手く歌いたいとか、間違えたらどうしようとか、そんな雑念が頭の片隅にあったのにいつの間にか消えて、平光先生とオーケストラと合唱団の皆さんと一つになり、合唱の喜びを体験できたあの瞬間を、私は一生忘れません。

入団する前の私のクリスマスの過ごし方といえば、家族や友人と楽しい時間を過していましたが、これからは第九を歌う事ができる。そのたびに、何かに気付く自分、何かを会得する自分になれると思うと、これからの“第九”の演奏会が楽しみです。

## 〈演奏会のご案内〉 ピアノ伴奏の「卯野杏実先生」のコンサート バレンタインの素敵な音楽のプレゼント!!

- 場所:各務原市民会館ホワイエ  
各務原市蘇原中央町2丁目1番地8(東海中央病院東)
- 日時:2019年2月14日(木)12:30~13:30(開場12:00)
- 費用:300円(大人)  
お申込み方法:各務原市民会館へ直接 TEL058-389-1818  
(予定人員:100人程度) まだ空きあります。

### ◆演奏予定曲

- ・愛の挨拶……………エルガー
- ・ロマンス へ短調 Op.5  
……………チャイコフスキー
- ・エリーゼのために…ベートーヴェン
- ・愛の讃歌……………モノー  
他

### 音楽家の名言より (VOL-3)

いろいろな感情を表現するのに、音色を変えないような人がいたら

「ぞっ」とするのではありませんか。……………マリア・カラス



### マリア・カラスの表現力に学ぶ

20世紀最高のソプラノ歌手と謳われたマリア・カラスは、抜群のテクニックとドラマティックな表現を併せ持ち、素晴らしい歌唱力によって一世を風靡しました。カラス以前の歌手たちは、どちらかというとオペラのドラマや役柄を掘り下げより、いかに自分の美声を聴かせるかということに重点を置いていたのです。それに対してカラスは反論します。「忘れちゃいけないのは、作曲家が何よりも台本つまりドラマから靈感を受けるのだということです。音楽は、そのドラマの一つ一つから飛び出してくるのです。」だから、様々な感情表現をするためには声の音色を変えるべきだと主張します。その実践に挙げられるのが、若き日のカラヤンとスカラ座のオーケストラで録音されたプッチーニの歌劇「蝶々夫人」です。カラスはヒロインの蝶々さんの成長過程を声だけで見事に表現しています。オペラの第1幕は、結婚前の初々しい娘時代の蝶々さんを可憐に演じ、第2幕は、子供を産み母となった女性の強さを巧みに表現しています。元々カラスの声は、個性的ではあるが、決して美声ではありませんでしたが、それを見事に逆手にとって大きな魅力に作り上げてしまったのです。

